京交山岳部報

No. 411　　'87　1月号

〔第1613回例会〕 **初登山**

二上山と屯鶴峰

日　　時　1月4日(日)　　出発　壬生　AM 7:00

コ ー ス　京都ー奈良ー香芝…春日神社…二上山雄山…二上山雌山…(二上谷)…屯鶴峰…香芝

担 当 者　岡田茂久(3282)

備　　考　地図　1/25000　大和高田

〔第1614回例会〕 **初春を迎へいい汗を出そう々**

北山　三頭山△728.2m

日　　時　1月8日(木)　集合　京都駅山陰線ホーム　AM 7:00

コ ー ス　京都駅ー八木駅ー(バス)ー越畑…芦見峠…三頭山…芦見峠…地蔵山…愛宕神社…清滝…嵐山ー松尾(小島)　新年会出席

担 当 者　烏丸　大倉寛治郎(889、491ー0430)　〆切　1月7日まで

備　　考　AM7:00発　園部行に乗車します。遅れないように。

途中より乗車の方は担当者まで連絡をかならずして下さい。

下山後嵐山で入浴します。

装備はアイゼン、ロングスパーツが必要。

地図　1/50000　京都西北部、　1/25000　殿田、亀岡

今月の集会及び新年会のお知らせ

日　　時　1月8日(木)　　PM 6:30

場　　所　桂川畔右岸松尾橋下流　200m

あみ船　　小島　TEL 381ー2605

会　　費　¥3,000.ー

担 当 者　本局　鷲見(852)　　九条　井戸澄夫(681ー8552)

備　　考　若干アルコール等が出ますので自家用車での出席は厳禁

〔第１６１５回例会〕　**スキー登山**

奥伊吹　射能山（ブンゲン）

日　　時　　1月11日（日）　集合　壬生（1／10）PM 8:00前夜発

コ　ー　ス　　1／10　壬生ー京都東Ｉ.Ｃー長浜Ｉ.Ｃー甲津原…奥伊吹スキー場（仮泊）

1／11　奥伊吹スキー場…射能山（ブンゲン）△1259.7m往路下山

担　当　者　　本局　大槻雅弘（722）

備　　考　　前夜発でスキー場で仮泊し、雪の上で一杯やり、山を語りたい。

明くる日、スキーだけしたい人はゲレンデで遊んでいてもよい。

山を登る人、シール持参。

1月8日　新年会〆切。

〔第１６１６回例会〕　**水の花が咲く樹氷の観賞に〆**

大和　葛城山から金剛山・湧出岳へ

日　　時　　1月26日（月）　集合　京都駅八条口近鉄改札口　AM 6:20

コ　ー　ス　　京都駅近鉄ー（電車）ー御所ー（バス）ー登山口ー（ロープウエイ）ー山頂…葛城山…水越峠…金剛山…湧出岳…千早ー（バス）ー富田林・河内長野ー京都

担　当　者　　烏丸　大倉寛治郎（889、491ー0430）〆切　1月24日まで

備　　考　　AM 6:31発　橿原神宮前行急行に乗車しますので遅れないように。

冬山ですので用具必携です。特にアイゼン、スパーツ、防寒具

交通費は実費。（電車、バス、ロープウエイを使用します。）

2月の集会

インドア　「山スキー」　　広瀬光太郎

2月　2日（月）　　PM 6:30　（場所未定）

企画運営委員会

各委員へは別に連絡します。

1月　中旬　　PM 6:00　　厚生会館　4F

京都府山岳連盟指導員研修会の御案内

内　容　　女性の為の山でのライフワーク　（男性も歓迎）

目　的　　氷雪技術又は、山スキー技術の修得、氷ノ山周辺

期　日　　昭和62年2月20日（金）夜～22日（日）

費　用　　12,000円　（交通費、保険代、その他）

詳しくは　本局　大木秀美（859）まで、〆切　2月5日（木）

山声雪語

耳と口　四寸の学

岡田茂久

―― 明けましておめでとうございます。 本年もよろしくお願いします。 ――

「小人の学は耳に入りて口に出づ、口耳の間は則ち四寸のみ……」。中国の旬子(じゅんし)という書の説くところである。

この文の大意はおよそ優れた人（君子）の学は耳に入るとそのまま心に収まり行動に表れる。又優れた人は一を問われれば一を答えるのみで余分のことは口に出さない。それに反して小人は耳から入るとそのまま口に出して人に説いてしまい、心に留まることなく行動にも表れない。すなはち耳と口の間はわずか四寸、学問はその間だけ体に留まっていることになる。おまけに学をひけらかし問われぬことまで口にだす、どうして人を心から説くことができよう。ということである。

人みな善人を説く中国の四書の一、性善説の孟子に対抗し、人みな悪人の性悪説を説く書ということを差し引いても耳の痛いことばである。

ところで、この山声雪語を担当してから年月のたつのは早いもので、もうすでに数十編の冷や汗ものの拙稿を諸兄に披露してしまった。ある事を見たり聞いたりすると〝うん！ わしもそう思う〟とメモをしておき山声雪語の原稿の種にしているのである。とても心に収めておき問われなければ答えず、行動で衆人の模範となすというような君子の学のまねのしようもない。おまけにその時の気分で書くうえに表現力が到らないものだから、バックナンバーを読み返してみると言っていることも矛盾だらけ、まったく赤顔のいたりである。それでもたまに〝山声雪語の自然保護論は〟などと批判を戴くと、〝うん！ あれはなあー〟と問われぬ事まであれこれと弁解に勤めたあげく、はては自説を押し付けてしまう。

これを先の〝旬子〟では、〝一を問われて二も答えるのを多言といい小人の学で非とする〟とばっさり。まさに耳口四寸の間、小人の学の極。しかし書くのが勤めとされれば、これもいたしかた無しと自己弁護をしている次第である。

集会等の席でも同じ事。私を始めとするほんの一部の発言だけで方向が決まってしまう事が多いのである。問われれば答えるだけで今日は黙っていようと、一応は君子のさるまねを気取ってはみる。しかし、生来のでしゃばりにいらちがくわわり、気が付けばべらべらと言わずもがなのことまでしゃべってしまい、あとで自己嫌悪におちいることもしばしばである。

願わくば若手諸君。わしらの若い時はとか、おまえらまだ十年早いというような顔の古狸に振り回されないよう、今年は彼等をしてギャフンといわせるような発言と行動力をもって、目にものをも見せつけてやって頂くことを期待します。問われれば答えるだけの会議もしてみたいのです。

また又、早々に多言を弄してしまったが、これもくされ縁と思って〝耳口四寸の学〟山声雪語に

今年もよろしくお付き合いくださるようお願い致します。

第１６０６回例会

御岳初登頂記

井戸澄夫

京交山岳部Ｓ．６１年秋山大会の最年少班として、広瀬（光）、大木、井戸（平均年令３６．５才）の３人は先陣を努めることとなった。当初参加予定だった竹田氏は急用のため、惜しくも参加できなかった。３人のルートは、早朝、京都を出発し、黒沢口から中ノ湯に入り、その日のうちに三ノ池まで登り、翌朝他グループと剣ケ峰で合流するコースであった。

高速道路を快調にとばし、中ノ湯（六合目）の駐車場に到着したのは11：30であった。暫時、久方ぶりの山の空気を胸いっぱい吸い込んだ後、小生にとって初めての御岳に第一歩をしるした。七合目をすぎるころから道の両側に雪が目立ちはじめ、八合目の金剛堂に着いたときには一面の雪景色で、積雪は約２０㎝であった。六合目から八合目までは所要時間２時間半で、快調なペースであった。篤い信仰の山らしく、山中にはいたるところに墓碑があった。小屋は閉鎖しており、まわりには冬ごもり前のウサギあたりが食べ物をあさったであろうような無数の足跡がついていた。

ここから先は、一般ルートでは二ノ池から剣ケ峰山頂を目指すのであるが、我々はヴァリエーションルートとして、三ノ池へのトラバースルートをとることにしていた。このルートは、諸先輩から、道が荒れ気味なので注意するようアドバイスをうけていたが、積雪も大したことがないので、たかが御岳山ごときと、３人ともタカをくくっていた。それに小生の地図（昭文社）には三ノ池まで所要時間１時間２０分となっており、積雪による若干の遅れを考えても、２時間もあれば日没までに、三の池小屋に到着すると考えていたのだが、そこに大きな落とし穴があったようだ。雪は深いところでヒザまでであり、ラッセルといってもさほど体力を要したわけではない。それでも実際にかかった時間は３時間強であった。おそらく雪がなくても２時間以上はかかっていたと思われる地図のコースタイムを信じたばかりに、到着したのは日がとっぷりと暮れてからであった。途中、万年雪がスノーブリッヂとなっている場所があり、急斜面のうえに、ブリッヂは巾が２ｍ、厚みが１ｍ程度しかなく、ヒヤヒヤしながら渡った。

三ノ池は完全に氷りついていた。小さな社の前に凡鐘が吊り下げてあり、たたくとしっ黒の闇の中に、すきとおった金属音が吸い込まれていく。悪のりしてピッケルの柄で思う存分叩いてしまったので、後日、タタリがあるかもしれない。三ノ池小屋は無人だが作りはしっかりとしていた。小屋は２つの部屋に区切られており、入り口に近い部屋は２坪程、奥の部屋は４坪程の広さである。

３人は奥の部屋に陣取ってほっとひと息ついた。まだ6時前である。夜がこんなに暗いものだとは思わなかった。土間はこおりついていた。大木氏がやっとの思いで岡田部長と通信できた。岡田氏のパーティーは田の原で幕営していたが、相当心配していたようだ。又、中ノ湯からの後発部隊

である、鷲見副部長のパーティともとぎれとぎれながら連絡をとることができた。さっそくＥＰＩで湯をわかして、木ぎれをあつめて火をつけた。木ぎれはしめっているかして、煙ばかりが多くなかなか火がつかない。広瀬氏はそれでもしつこく火をつけようとしている。部屋中に煙が充満して目もあけていられない状態となったが、寒いよりはましかと思ってガマンした。晩さんはカレーであった。その夜は強い風がひと晩中吹いた。小生はウイスキーをあおり９時頃に就寝したが、あまりの寒さに１時頃に目が覚めてしまった。さすが広瀬氏は寒さに強い。悠々と寝ている。思えば、Ｓ５８年２月の木曽駒千畳敷カールにテントを張ったときも、零下２０°Ｃの極寒の中で、汗をかきながら寝たというだけのことはある。小生はションベンのためシラフを脱け出した。外は強風で雲が吹きとばされ、空は藤の森のプラネタリウムも真青になりそうな、星のプロムナードであった。月がないだけに星の輝きがきわだってみえる。スバラシイ！　山登りをやっていてよかった！　生きる希望が沸いてきた！（いいかげんにしなさい！）結局もう眠れなくなって、夜明けまで小生は燃えない木ぎれと悪戦苦闘することになったのである。モウモウたる煙の中、まんじりともせず、火を守ったのである。おかげで次の日は、雪焼けならぬ、スス焼けの真黒な顔で剣ケ峰に登場することになったのである。

翌朝は、寝不足で、はっきり言って、バテてしまった。継母岳に行くどころではない。剣ケ峰への到着も、田の原からのパーティに遅れてしまった。しかし、山頂までの道中は、素晴らしい展望であった。北アルプスから中央アルプス、八ケ岳、南アルプス、富士山といった山々が、新しい雪の化粧をして迎えてくれた。かくて小生にとって初の御岳登頂は、思い出に残る感慨深いものとなったのである。

〔コースタイム〕

１１／１（土）　京都東ＩＣ　6:50 －中津川ＩＣ　9:25 －寝覚ノ床 10:20 －黒沢 11:03 －中ノ湯 11:30 ～ 11:45 …七合目 12:40 …八合目 14:10 ～ 14:30 …三ノ池小屋 17:36（泊）

１１／２（日）　三ノ池小屋 7:45 …サイノ河原 9:00 ～ 9:15 …二ノ池新館 10:00 …二ノ池小屋 10:15 …剣ケ峰 11:09 ～ 12:30 …九合目 13:24 …八合目 14:05 …中ノ湯 15: ?－野麦峠 18:10（泊）

１１／３（月）　野麦峠 8:30 －京都東ＩＣ 13:30

第１６０６回例会

秋山集中登山　御岳

和田良一

秋山登山「御岳」に参加することになった岡田パーティー４人と鷲見パーティー４人は、２台の車にリュック等いっぱい詰め込み先発隊の大木パーティーを追うべく、九条車庫をあとにした。

まもなく部長が「アッ忘れた！」「何を！」「豚肉！」「えッ！」・・。昨日買った水だき用の豚肉を部長の家の冷蔵庫に入れたまま置き忘れたとのこと、引き返して取りに帰るわけにもいかず途中で購入した。

昨日まで気持ちのよいほどつづいていた天気が、今日は雲が多く雨が降るのではないかと思いつつ、名神・中央高速道路を走りつづけた。

恵那のＳＡで昼食を食べることにした。今日は、連休の前の土曜日で会社によっては３連休となるため、人と車でいっぱいである。

今にも雨が降りそうななか、われわれ８人は車座になり、それぞれ持参の弁当をひろげ、いつもの山行同様楽しく料理をたいらげた。

ちょうど食べ終わった頃、雨がポツリポツリと降ってきたので、早速片付けて出発した。

中津川インターを出てＲ１９を（２月にスキーに行った時、長時間の渋滞に巻き込まれたことを思い出しながら）順調に走り寝覚の床に着いた。途中でおいしいコーヒーを飲もうといいつつ、ここまで辛抱してきたのである。

ここで、岡田部長が先発の大木パーティーと交信することができた。彼等は８合目付近を霧雨のなか避難小屋へむけて歩いていることがわかり、また１時間後に交信することにし、待望のコーヒーも飲んだところで出発した。

雨はひどくはないけれども、雨の中テントで一夜を明かすことを思うと気持ちが重い。

Ｒ１９と別れて少し走ったところのＧＳでポリタンクに水を入れ、黒沢で出海さんの車と別れてわれわれは田の原へと向かった。

雨はたいしたことなく、スキー場付近ではガスがかかっていて視界がわるい。まもなく田の原の駐車場に到着した。

さすが２２００ｍの高さは寒い。早速観光センターの軒下にテントを張ることにした。丁度、テントの幅プラスαが軒下でベンチあり自動販売機ありでいうことなし、自動車とベニヤ板で風よけをして夕食の準備にとりかかった。食事の水だきでは４人が肉・野菜の食べ放題、満腹になってもまだ肉があまっていた。

大木パーティーとの交信は、若干遅れ気味ながら順調に目的地に向かっていた。

周囲は真暗、２カ所のトイレと自動販売機の電気だけが点灯しているがまったく人影なし、「オ

ーイ」と呼ぶと誰かが返事をする。「誰かいる」と思えども、結局は遠くに自分達の声がコダマしているだけである。

明日はどうぞよい天気になるよう祈りつつシュラフにもぐった。しかし、なかなか寝つかれず、テントから顔をだすことたびたび・・・・・・。

夜半より風が強くなったが、明日が晴れるような感じの風であった。やがて雲が切れ星が見えるようになり、うっすらと御岳山の全容がみえる。部長が「やっぱり精進がええ、あした最高の天気になる・・・」と・・・・・。

深夜から明け方にかけ登山者の車が何台きただろうか、又ある１０人位のパーティーがわれわれのテントの傍でガタガタと音をさせるので目覚めた。辛抱していたが部長が思わず「寝ているから静かにしてください。」と注意・・・・・、夜が明けると雲一つなく快晴で最高の天気である。

朝食のうどんを食べ身支度をしたのち王滝頂上を真正面に望み「サー出発」と記念写真をとって田の原をあとにした。

田の原天然公園のあまり高度差のない湿原の道から木で階段状につくった道を登りつづけると大江大神に着いた。ここでひと汗かいたので服の調整をし、これからの急登にそなえた。

森林限界もすぎ田の原を振り返りながら「もうここまで登ってきたんだなぁ」と熔岩の道を一歩一歩すすめる。やがて、通称「イノシシ」と呼ばれている金剛童子の前に着き休憩、東の方には八ケ岳連峰・木曽駒などがよく見える。

さあ、あと半分、渡辺さんや方山さんの女性軍「シンドイ」とも言わず黙々と歩いている。我輩はとても「シンドイ」、早く頂上に着いて下りたいと思いながら、積雪のなか王滝頂上をめざす。最後の急登、頂上小屋が大きく見え、やっと御岳神社の鳥居をくぐり頂上に到着した。

風が強く大変寒い、そして噴煙のイオウが匂う。地面は凍ってつるつるである。噴火口を見に奥の院の近くまで行き「シュー」と噴火している穴の奥まで見えた。イオウのひどいときは周辺が全部黄色くなるという。

休憩後、足を滑らさないよう注意しながら剣ケ峰へ向け出発。他のパーティーとも快調に頂上へ向かっている１１時には頂上で合流できる。

最後のひとふんばりでやっとのおもいで待望の剣ケ峰に到着、雪が凍ってツルツルだ。

山頂は３６０°の大パノラマ、北の方には乗鞍岳から穂高連峰・槍ケ岳が東には八ケ岳・南アルプス連峰や真っ白な富士山、西には白山もうっすらと見える。雲ひとつない空で晩秋の３０６３．4mの山頂にいる気分は最高で今までの苦しさがいっぺんにふっとんでしまった。

やがて頂上直下に大木パーティー、その下に鷲見パーティーの姿が見え、１１時すぎ全員無事頂上にて合流した。

各パーティーと頂上までの話に花がさくなか万歳三唱し、鷲見パーティーは王滝、われわれ７名は黒沢口へと下山することにした。

最初は積雪のなか、アイゼンをつけ８合目まで右に左にと美しい景色にみとれながら快調に下りたがそれ以後は樹林帯のなかを約2時間味気ないダラダラした道を「こんな道をよう登ってきたな

あ」と思いながらやっと中の湯の駐車場に辿りつき『信仰の山・御岳』を後にした。

黒沢の交差点で鷲見パーティーと合流するべく2台の車はすぐ出発、目的地では武田さんが一人待っておられ、話を聞くと出海さんが今日中に帰る予定の鷲見夫妻を木曽福島駅迄送って行ったとのことであった。その後3台は次の幕営地である野麦峠へと走らせた。

野麦峠ではお助け小屋の駐車場にて幕営、食事の後、雲ひとつない星空を楽しみ一夜を過ごした。

翌朝、峠からの御来光や朝焼けの乗鞍岳を満喫、テント撤収後先に帰ることになった大木、井戸、広瀬の3君と別れ残った6人は、先日、先輩が歩かれた旧野麦街道のお地蔵さんまで往復し富山経由で帰ることにした。

乗鞍鈴蘭スーパー林道では、乗鞍岳を左右に、又白樺林のなかを走り、広々とした鈴蘭高原でカレーライスを食べ白骨温泉につき3日間の汚れ、疲れた体をいやすため早速『泡の湯旅館』の露天風呂に入浴、乳白色のぬるいお湯であったが『美しい御婦人の裸』も見られ鼻の下をながくして楽しく入浴できた。

さっぱりした気分になった6人は、今度は夏山合宿のとき登った穂高連峰を目前に最高の気分で林道をドライブし安房峠に出て平湯温泉から神岡・富山へと走り帰京した。

今回の御岳集中登山、私達6人はフルタイムで、山ありドライブあり温泉ありと3日間を楽しんだわけである。

〔参加者〕　（岡田班）　岡田、和田、方山、渡辺明
（鷲見班）　鷲見夫妻、出海、武田夫人

〔コースタイム〕

11／1　九条車庫 9:30 ー東インター 9:55 ー中津川インター 12:55 ー寝覚の床 14:00～14:30 ー黒沢口 15:00 ー田ノ原駐車場 15:55

11／2　田ノ原 7:15…七合目（大江大神）7:40～7:50…八合目（金剛童子・イノシシ）8:15～8:30…九合目 9:05～9:20…王滝頂上 10:05～10:25…剣ケ峰 11:00～12:20…九合目（山荘石室）13:20～13:35…八合目 14:05～14:15…六合目（中ノ湯）15:35…黒沢口 16:10～16:45 ー野麦峠 18:20

11／3　野麦峠 10:05 ー鈴蘭高原 11:15～12:10 ー白骨温泉 12:30～13:25 ー平湯 14:30～神岡町 15:20 ー北陸インター入口 16:30～16:50 ー南条ＳＡ 19:00～19:30 ー敦賀 20:00 ー九条車庫 22:25

第１６０７回例会

荒谷山と市振

大槻雅弘

山が好き。山ならどこでもいい、と言う人と、山ならこんな処の山はどうかな、と言う人は同じ山好きでも違う。何を好んで、こんな処の山まで来て登るのか。地元の猟師の人でさえ知らないような山を。その猟師の猟犬を６匹引きつれて登ってきた、京都山の会との合同登山をしたレポートである。

そもそも、この企画をしたのが６１年３月１５日。日本山岳会京都支部結成の日、二次会のある場所だった。「秋にでも一度一緒に登りまひょか」と京都山の会の西尾会長と約束したのが今回計画した例会である。その約束したことを１０月に花ノ木段へ登った折、伊藤先輩に話したら「山の会もいろんなとこ登ったはるさかい荒谷山やったら」と言うことでこの山に決めさしてもらった。

京都を夜の８時に出て、現地の河合は１１時１５分着。昼はうんざりするほど混むが、夜の国道は走りやすい。着いた所は神社の駐車場、軽く夜のセレモニーをしてシュラフにもぐった。

１１月１５日。

山の朝にしては遅い目覚めで、すっかり明るくなった頃に起きる。最近は便利になったガスコンロ、マッチ１本ですぐにポーと、ブルーフレーム。熱いみそ汁で朝食をすませた。

さて、本日の目的地、荒谷山はどのコースを取るべきか地図を拡げて作戦を練る。当初考えていた北山宮から荒谷峠をつめる尾根道は長いし、また、山中でテント張るのもしんどいし、エエ道は無いかと思案。坂井氏に近くの人家まで道を尋ねに行ってもらった。

２万５千分の１で読む限りでは、河合より向谷林道か、それとも坂本ダムから西ノ谷林道をつめるかどちらか林道を利用するのが早く登れそうである。あれや、これや論議していると坂井氏から「西の谷はトンネル工事で通行止めや」という情報である。しかし、トンネルというからには、地図より相当奥まで道が入っているであろうし、とりあえず入るだけ入ろうということで河合から坂本ダムを経由して西ノ谷へ車を廻した。

結局、遠廻りしたが２日後に開通式を迎えるというサンギリトンネル５００m程手前まで車が入れた。やっと、目的の山が目の前に現れた。山はトンネルから真東に位置する。さて、登るには目の前だが西の谷が深く切り込んでいて、この谷へ一度降りなければどうしても登路にありつけないようだ。

ちょうど、今日から解禁日だということで山に入っていた地元の猟師二人から道を尋ねると、やはり一度谷へ降りて、ピークより西に伸びる尾根へ登るといいと教えられた。

言われた通り、トンネル入口近くの尾根を一気に下り、西の谷へ降りる。先程の猟師の犬が、人なつこくついてくる。猟犬がこれでいいのだろうか……。

谷へ降りた地点からしばらく歩くと、こんな処が、と思われる場所に、人家らしき跡を見る。こんな山奥に、人が住んでいたのだろうかと不思議に思えた。

そこから10分足らず、高度約850m地点で滝に出合う。西の谷に40mぐらいの滝と、右手荒谷山側からも滝が落ちて、行手を阻まれた。

この静かな山へ、静かな谷へ、この滝の出合は何か心を落ちつかせるように、我々に一服の場所を、時を与えてくれる。ラストの私は、皆が一服してスタートした後も、暫しこの静かな場所を離れがたかった。

滝からは、すぐに三角点に向って東に尾根を登る。予想したよりブッシュは無く、灌木の間を獣径が続き、既に、初冬を迎える木々は裸になり、行く足元を落葉で埋めていた。

ただ、後を振り返るとちょうど目の高さに、林道工事をしているブルドーザが目につき、自然を削り取っているのが痛々しく感じた。径は、犬達も何度か通っているかのごとく、人が常時往来しているかのごとく、よく踏まれた所がある。ブッシュ漕ぎを予想したのに、スムースに登れてありがたい。

稜線直下は、熊笹が密生しているがそれでもなんとか獣径が続き3等三角点1267.2m荒谷山を踏めた。 静かな山頂は、新宮山の会の標識が迎えてくれた。展望もなく、恐らくそう人も訪れることも無いであろうこの山頂で、一際、大きく声を出して恒例の万歳をした。その横で何故か6匹の犬がワンワンと吠えていた。余りにも人なつこいその犬達と、少し早いが昼ごはんにしたのである。

勿論、やさしい山の会の横田さん、持参のにぎりめしを1個づつ犬に分け与えたのが。結局、犬はカシコイのかどうか、主人をほったらかして解禁日を一日棒に振ったことを思うと、我々が何か悪いことをしたように思え少し心苦しく感じた。

下りは、往路下山した。そうも時間はかからず、犬も人も車まで3時過に着いた。思いもよらず山が簡単にかたずいたので、今夜の宿は小穴川の小処温泉の湯につかり、その上流でテントを張ることにした。

雲が流れ、月が表情を変え、星が語りかける。静かに、山の夜は更ける。せせらぎの音、焚火を囲み坂井先輩のいろんなタメになる講義を拝聴している内、時の過るを忘れた。

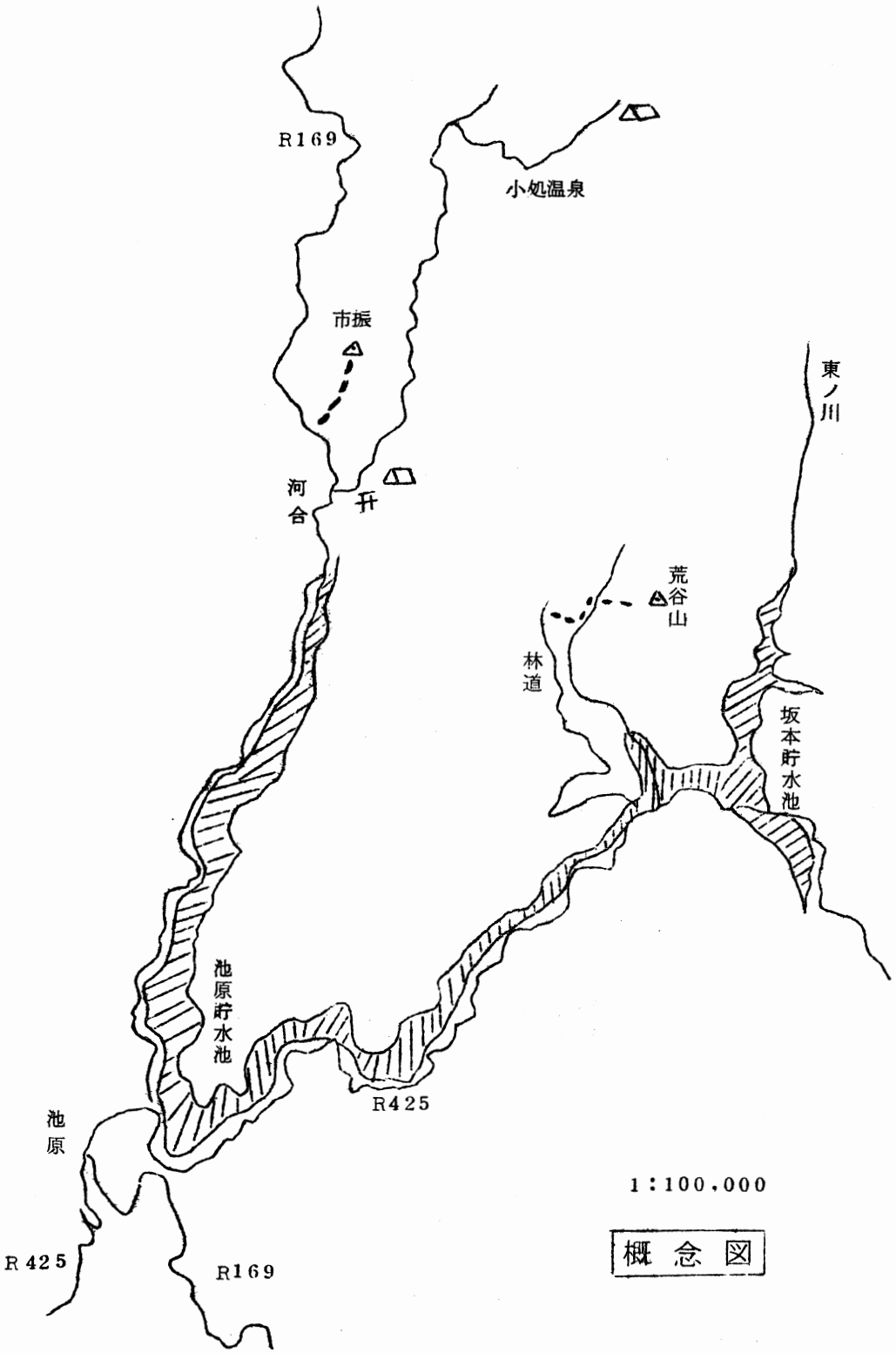
11月16日

何か、申し訳ないように簡単にかたずいた荒谷山を後に、そのままではと言うことで、小穴部落の西に2等三角点843.0m市振があるのでそれを登ることにした。

温泉から河合までの途中、「遥れ来て　みを奥山の柴の戸に　つきと心を　あはせてそすむ」と詠われた南北朝終焉の北山宮（南帝王）の瀧川禅寺を観る。所謂、南北朝帝位を争うこと57年の歴史ある寺である。今から500年以上前にこんな山奥で、日本の歴史上に残る争いがあったとはとても思えぬ土地である。

——　史学に隻眼を有する士の、来り訪はんことを望むや甚だなるものがある　——

と栞には記している。


R169
小処温泉
市振
東ノ川
河合
荒谷山
林道
坂本貯水池
池原貯水池
R425
池原
R425
R169
1:100,000
概念図

そして、５００m下流には北山宮があり再度車を止めて観る。目的の山は、河合まで戻り、奈良国体の時に付けられたという北山川に掛る吊橋を渡って山に入った。径は、国体踏査競技に使われただけあって、よく整備されている。

ザック、ザックと厚みのある落葉の絨緞は、赤や黄色と縦、横に織りなし自然の模様をつけている。今日は、坂井先輩の植物学講義を聞きながらの登山。あれが何、これが何と説明をしてもらうがみんな右から左へ流れ、申し訳ないが頭の中で止まらない。でも、「匂いかいでみい」と、鼻で覚えたのが一つ。龍脳菊。可憐な白いその菊は頭の中で止った。

ほとんど、講義は頂上まで止まらず続いた。山の会の人達と、楽しく話し合っている内、２等三角点市振へ着いた。河合で仕入れた缶ビールは心地よくノドを通りしばし山談議に花が咲いた。

２つの山を登り、最後の仕上げは八百年の歴史を誇るという入之波(しおのは)温泉、山鳩湯で汗を流し、晩秋の山旅を終えた。

今回、最初から計画していただいた伊藤先輩が、参加出来なかったのが残念であり、次回には是非参加してもらい、いい山旅をしたいと思う。

〔参加者〕　（京交）　坂井、奥村、武田、吉田、大槻雅弘

（山ノ会）西尾、横田明、竹内、横田

〔コース・タイム〕

１１月１４日　壬生 19:05 ー伏見 20:00 ー 23:15 河合（テント泊）

１５日　起床 6:30 ～河合 7:11 ー車止 9:03 …9:12 サンギリトンネル…9:35 尾根下る…9:55 西の谷…10:08 滝…11:40 荒谷山 12:20 … 13:48 滝… 14:32 トンネル…小処温泉（テント泊）

１６日　起床 6:00 …滝川禅寺…北山宮… 8:48 河合… 10:38 三角点市振 11:17 … 12:00 車止ー 13:05 入之波 14:06 ー 18:40 壬生

第１６０８回例会

府県境シリーズ

三国岳　弥十郎ヶ嶽

横井　襄二

良い天気が続いていたので今日の空を心配していたが好天に恵まれた。7時過きに壬生を出発して一路今日の目的地、三国岳と弥十郎ガ嶽へと向う。途中老ノ坂を越えた途端、霧、朝霧は好天のしるしと云はれるが、サーチライト（古い）でも１００米も視界はないだろう。無風状態の時、地表の附近の空気冷やされて細かい水滴となって霧が発生するのだが、亀岡盆地が何故この条件に合っているかは又の機会に勉強することにして、車を進める。霧も湯の花温泉の手前より晴れて沿道の農家の建物、今をさかりに咲く菊の花、赤くうれた柿の実にも朝の光が映えて美しい、田園風景の３７２号線を走ること ５０分で弥十郎ヶ嶽のふもとの畑市という集落に着く。

集落より少し登ったところに小さなキャンプ地があって、こゝで車をすて昼までに山頂を往復することにし軽装で出発する。

津田さんによると、5・6年前に登った時は山頂は樹木が多く展望は全然きかなかったらしいのであまり期待せずに登る。この辺りは檜・杉の4・50年生位の植林した林の中のゆるい坂を登るほどなく進むと沢筋にでるが少雨の今年のこと、水は全然ない。岩にでたこけが一雨欲しそうだ。ごつごつした岩を登ると、右側に洞穴がある。入口の直径は6米位で奥行は15米位、奥はタタミ10帖程の広さがある立派な洞穴である。人工の洞穴であれば、のみ跡やこの穴の大きさから相当量の岩石のくずが見当りそうだがそれもないので天然の洞穴かも知れない。

津田さんの調べでは、かっては此の山に山窩(さんか)が住んでいたとも伝えられているので彼等の住居の跡だったかも、大きな口を開けた洞穴は答えてくれないが、ロマンとして心に残して置こう。山にはこうした洞穴、洞窟、岩窟等があるが一番適切な言葉、ひらきは洞窟のように思はれるが…？洞窟で少し脱線したが、少し登ると滝が見える。高さは7m位はあろうか、ご多分にもれずこの滝も水は一滴もなく、正に枯山水の様を呈している。この辺りから谷が広くなり明るくなる。左側に水ならか、くぬぎの類と思はれる落葉した梢が折からの朝日に輝いて信州あたりの白樺と見ま違う景色をみせてくれる。右に椿の林をみながら登ると稜線にでる。右に90°曲り10分程明るい雑木林を進むと山頂である。

山頂は津田さんの先程の言とは違って20米四方が伐採され360°展望をほしいまゝにしている。北に多紀の連山、東に深山、西に兵庫の山々等が手に取るように見え嬉しい誤算である。津田さんが弁解することしきり、本人が悪いのではない、山頂の樹を伐った人が悪い？のである。昼食は三国岳の方でするので、こゝでは軽いおやつと果物で済ませる。30分程の休憩で名残り惜しいが下山する。下山は登りと違って頂上より少し下ったところから右の方へと行く。この辺は落葉のじゅうたんが敷きつめられたようでクッションさえ感じる落葉の厚さがある。しかし、しばらく歩くと道が急に狭くなり藪の様相になり道もなくなり、野ばらのとげや草木の根に帽子や足をとられ落石に注意しながら下る。スリルもあって案外面白い面もあった。（不謹慎？）

最後の大きい杉林のところは特に急勾配で一気に下ると先に登った道の横にたどりつく。思っていた位置より大部奥の位置で地図の見方が多少甘かったようだが、無事キャンプ地に到着する。昼も近くなって来たのでキャンプ地を後に次の目標の三国岳へと車を走らす。

この辺兵庫県の東部で山村地帯で過疎地だろうが、家の造り庭の手入れ等が行き届いていて経済的に裕福そうである。猪の本場で山の幸に恵まれているのかも知れない。約7km程東北東へ進んで三国岳のふもとに着く。こゝで車もすてゝザックを一杯にして三国岳の取付の林道を進む。700米位で地元の人に会ったので三国岳への道を教へてもらうが、結果的にはこの道は地元の人も殆んど通ってなかったようだ。

この近道は林道から左へ入ったところからの登り、始めはゆるい谷筋で比較的歩きやすい道だったが尾根に出て右へ廻った辺りからどうも道があやしくなってくる。潅木の雑木林の中を進むと又尾根にでる。こゝで右左いづれをとるかで意見が分れたが、樹々の間から少し見えるゴルフ場らし

き建物から判断して右へと進む。左へ行っていれば1時間程ロスをしていたと思う。地図をよくみることを痛切に感じる。こゝから山頂までは藪こぎで急な斜面を喘えぎながら登る時間にして30分位かったが空腹なので刀が入らず、今日一番の難渋か所、女性の3人は大して苦にもしてない様子で、さすが京交山岳部の女性と感心する。

急に視界が開けたと思ったら目の前に突然頂上の三角点の石、ほんとうに突然であった。頂上は5米四方の空地があるだけで展望は今一つさえない。又、訪れる人もまったくないといってよい位の山であるが、晩秋の光を一杯にあびて食事の用意をする。もち入りのうどん、ラーメン、ベーコン入りの野菜だき、各自の手作りの弁当等、車座になって先程の登りの苦しみを忘れ、和気あいあいと宴を運ぶ。気温21°非常に良い天気だ。上空の飛行機雲が非常に印象的、一時間程の休憩の後、頂上を後にする。松・杉の混じた急な坂道を少し下ると、登る時に会った地元の人に又出合った。きくところによると、来年の松茸の収穫のための松林の下刈中とのこと、10数名が作業をしているが、急斜面で下刈の樹も多く1日の作業面積は知れているので大変な作業量だなあと感じながら下ると、広い林道にでる。こゝから少し下ると先程登りに取りついた地点につく。この下った地点を逆に登ったら簡単に山頂に行けたかも知れないが、苦しい藪こぎも後になれば楽しい思い出とし残る。右に大きい栗林を、左に松茸山らしいロープのある山をみながら車の置いてある場所に着く。池田市へ単車で帰へる阪急の松田さんと別れて372号線を通り、途中、亀岡の稲荷神社の山に寄って晩秋の夕日を背に受けて無事帰京した。　　（昭和61年11月23日）

〔参加者〕　岡田、渡辺智、鷲見夫妻、三橋、津田、原田、方山、横井

（特別参加　阪急山の会）　松田、　榊

〔コースタイム〕

弥十郎岳　コースタイム　　みぶ 7:20 一畑市キャンプ場 9:00 ～ 9:20…峠 9:50…大岩 10:00…2等△ 10:20 ～ 10:50…車止 11:30

三国岳　コースタイム　　奥原山 12:15 ～ 12:20…3等△ 13:00 ～ 14:00…車止 14:30

第1609回例会

多田ヶ岳紀行

津田　実

先日、大槻雅弘さんから「多田ヶ岳を例会に組んだから」とお誘いを受け、百里ヶ岳へ行ったとき、三橋さんから、アレが多田ヶ岳だと教えて貰ったが、雨と風でどれやら判らず仕舞いだった。

そこで、泥縄式に本箱をかき廻し、案内書を探すと、あった、あった。高田収さんの中高年の山P32に、タイトルも楽しく、　海のある奈良の文化財巡りと　若狭三山の一峰を結んで　野代から多田ヶ岳、とある。

以下その前文を紹介しよう。

「海のある奈良」とも呼ばれる若狭小浜は、かって都と大陸を結ぶ要路であり、すぐれた文化遺産を数多く残している。尾崎の円昭寺には大日如来像、不動明王立像があり、竜前の若狭彦神社は遠敷の姫神社と共に若狭一ノ宮と称され一国鎮守の大社である。庭園と山紅葉で名高い金屋の万徳寺には、阿弥陀如来が安置されてあり、本堂と仁王門が国の重要文化財になっている。

そのほか、「お水送り」の行事で知られる神宮寺、若狭国分寺の薬師如来、羽賀寺の十一面観音など、若狭小浜は古き文化財の宝庫である。

その中でも別名長尾山ともいう多田ヶ岳周辺には、多くの社寺が点在しているので、これらの文化財巡りと登山とを組み合せれば、興味深い山行となるだろう。

多田ヶ岳は、青葉山、飯盛山と共に若狭三山をなしている。標高は７１２mではあるが、若狭湾と小浜の街を見下す展望のよい山である。　以上。

これを読んでこの山へ登らんヤツはアホや、そこでそのアホでないヤツが車２台で一路若狭路目差して一目散。

花折のトンネルを抜けると平の集落周辺は一面の雪景色。川端康成氏の「トンネルを抜けると雪国だった」の一文を思い出す。

Ｒ２７号を木崎で右折し、眼病に霊験あらたかな薬師如来様が祭られている多田寺を左手に多田林道を山懐奥わけ入って行く。舗装が切れ地道になり、地図上１３２地点の上部のカーブで車を捨て、服装を改めて出発、当初２時間位で下りて来られると思い手ぶらで行こうとした途端、大槻さんの大喝が頭上に落下、「お父ちゃん、手ぶらで何事や、荷物はどうした」「いや、２時間程で下りて来られるサカイ」「アホなこと云うな、登りに２時間かかるのや、それに此の雪や、どこ見てるんや」　コラエライ、スンマヘン。蒼惶としてザックを取りに戻る。

駐車地点より大きなカーブを過ぎ、約２㎞で多田ヶ岳登山口の標識のあるところに到着。林道は直も上部に続いていたが草茫々人も車も通った形跡無し、地図で見ると登山径は多田谷源頭に続いているらしい。

最初は谷つだいで初冬の谷歩きは、先日の百里もそうだったが余りありがたく無い。然し、此れより径がないので仕方がない。

吉田さんが家族連れだから幼児を疲れささないよう、緩っくりと歩き出す。谷と別れて水平歩道となり明るい陽のあたる地点で一本立てる。途中で見た立派な滝の水量が恨めしい、此の水が尾根一つ南に流れて呉れたら、琵琶湖の水不足が少しでも助かるのに!!

それからも枯れたヤブ道をどんどん進んで、右手谷向うに野代から登って来る径を見付け後方に若狭湾が見えるところで２度目の休憩、若狭の海が此んなに深く内陸に入っているとは知らなかった。余り景色が好いのと向い側の野代からの径に気を取られ、多田ヶ岳の取付点を見落して多田谷源頭部迄行って仕舞い、多田ヶ岳と、５５５独標と結ぶ線上で、それと気付くお粗末、皆にオコラレて、エライスンマヘン。

それから三角点目差してヤブを強地、すると途中で好い登山径に出合った。三角点は小広く、全員揃ったところで万才三唱、記念写真をとる。

すかさず誰か、「おとうちゃん、フイルム入ってるやろな」　１０月に大多和峠から白銀の薬師岳を写して宿に帰ってフイルムを換えようと思ったら空だった、その話を誰か覚えていたらしい。そんな、ショーモナイコト忘れて仕舞え、今日はチャンと入れて来たワイ。

百里四方が見渡せると云う明文町に迷って登った百里岳は雨と風で震えて帰ったが、今日は快晴で冬山装備が泣く程、温い。

前に若狭湾と小浜の街、後に先日の百里ヶ岳、駒ヶ岳、近江、京都の北山と重畳と続く山々、落葉の上につもった雪で滑り乍ら難儀の連続で登って来た甲斐があった。

山屋の一番充実感溢れるときである。それに一杯のお呑物、全員でする楽しい食事、コンナ、エエ山、来んヤツはアホや。

下りは先程の小径を雪に滑り乍らおりて行くと、何んと、若狭湾が見えると嬉んでいたところえ出た。山え来て海を見ているサカイ径を見落したのだ。山へ入ったら、山を見よと、よい教訓を与えられた。

帰りに、お父ちゃん、目が毫碌してるサカイ、目のお寺に詣って行こと親切なリーダーのお言葉に泣いて喜んで行ったら拝観料が高いサカイ、此所で詣っとけと宣り、仕方なく門前で、叩頭百万辺、　合掌　再拝

此れでは目の毫碌のなおる見込当分なし。

尚、　最初は、多田ヶ岳と飯盛山（ハンセイザン）に登る予定でしたが、思はぬ積雪で時間が超過、飯盛山は割愛しました。

〔参加者〕　大槻雅弘、　吉田Ｆ３、　三橋、　和田、　大木、　渡辺哲、　津田

〔コース・タイム〕　６１．１１．３０

みぶ 7:11 一駐車地点（出発）9:50…登山口標識 10:25… 12:15 多田ヶ岳、山頂 13:40 …登山口標識 14:23… 14:50 駐車地点

黒河川ブナ林偵察記

大　槻　貞　従

日　時　　1986．10．26（日）　　AM7:00～PM3:00

場　所　　福井県敦賀市黒河川周辺

１０月２６日（日）　晴

今月５日に続いて又、野坂山地へやって来た。昨年敦賀営林署で教えてもらったこの周りは近郊

では最もすぐれたブナ林が残されているとのこと。最近ではどの府県でも造林公社が闊葉樹林を伐採し、杉の木をせっせと植林しているので、闊葉樹林が少なくなっており、四季折々の山林の美しさ、うつり変りの楽しさが味えなくなってきた。その数少ないブナ林を一目見ようと藪山に突っ込んでいった。芦谷山△８６６mを目ざして適当な取付きから背の低い紅葉の林へ分け入った。はるかな稜線にはもこもことした樹冠の群がはっきりと見とめられる。ブナ林原生地帯であることが分る。他方の斜面は伐採されて明るい、その反対側にこんもりと丸い樹冠帯が延々と続いている。1kmはあろうかと思われる。そこを目指して藪をかき分け進んでいくが、稜線は近づかない。ついに時間切れのため稜線まで到着出来なかった。しかし紅葉はまっさかりであり、身体を紅く黄色く染めて紅葉した雑木を踏みしだき、その中にうずまりながら、弁当を広げる気分は最高です。黒河川の谷は深く切れ込み、奥深く長蛇のごとく続いている。水量も豊富で、源流部まで分け入ったが、もう一歩のところで源流部湿原を見ることが出来なかった。地図上では南北５００m東西１００mぐらい大きな湿原が記入されている。想像するに春夏にはどんな花が咲いているか、きっとすばらしい花が咲き乱れていることだろう。知られざる秘境へ分け入るような楽しみがある。次回の宿題として、今回は偵察行ということにして帰途についた。途中黒河峠から敦賀寄林道周辺にも、今まで気がつかなかったブナ林が残っていた。ゆうよくとした王者の風格をしたブナは広い間隔を開けて空天までそびえている様は、まさに森林公園といった感じである。今年旅行したカナダのスタンレーパークの森林公園を思い出した。しんかんとした原生林ではリスが跳ね回り、アライグマが用心深く道をよぎる。黒いカナダ雁の大群が寝そべっている。カナダの大自然にはかなわないが、それでもまだまだ大自然が日本にも探せばあるということが分かったのがうれしい。

〔参加者〕　三橋、大槻貞　　2名

〔コース〕　黒河峠…三国山往復～芦谷山周辺

中山連峰縦走

坂井久光

１０／２７　一昨日我会（一等三角点研究会）の副会長高田収から、山渓の２月号の原稿（中山連山）が仕事が忙しくて書けないからと云って私に代ってくれと電話があり、代って久しぶりに中山へ行くことになり、自保委員会で会った宮村氏（趣味登会長）を誘った。又最近新入会した佐藤氏（十二支会員）と私が仲人した北川氏（国鉄勤務）の四人で中山駅に集合して思出多き中山へ向った。

中山寺は西国三十三番の札所で紫雲山と号し、第二十四番の十一面観音を本尊とする真言宗の古刹で、聖徳太子が修業した寺としても名高く、四時参拝の客が絶えず門前町の土産屋も多く賑っていた。

寺に参り、西門を出て中山公園へ出て荒れた登路を登って松林の尾根に出た。此所から展望が開け、眼下に宝塚や伊丹の都市が広がり、甲山・六甲山が西に見える。その先でN・H・Kのテレビ中継塔に出たが、此所も良い展望台で東に中山台団地が山を切開いて山頂近く迄延上っていた。変れば変る山の姿ではある。

思出は戦前の大阪商科大学の最初のクラス会のハイキングが此の中山寺ー中山△ー清荒神のコースで行はれたのであった。今は亡き永並教授も元気でクラス一同が中山奥の院から山頂へ立って清荒神に下山して解散となり、親友4人と一緒に川面（宝塚歌劇家校所在）から阪急宝塚駅へ始めての宝塚の街を歩いていたら、近所の宝塚予科の生徒のN・Aが母親と一緒に寄宿へ帰るのに出会った。全く思い掛けぬので吃驚して挨拶したが、4人の友人がひやかして「宝塚の メッチェンを知っているとはけしからん。」とか因縁をつけて近くの喫茶店へ連込まれコーヒーをおごらせられた。入学迄受験勉強一筋だったが、入学して以来先輩やら級友の影響でその反動からか宝塚に関心を抱き大劇場へ通うようになり、夏休みに帰った彼女から歌劇学校の内裏話を聞いたり、私のカレジライフを近所の友人と涼台で話合ったりした。又その頃受験旬報と云う雑誌があって受験突破記を送ったら採用されて原稿料金十円也が送って来た。又後輩の父兄から入試の指導を頼まれて週三回で月30円のアルバイトもするようになり、物価の安い頃だったので小遣いは父からの10円とで可成だった。

それで彼女が学校へ手紙を呉れたのが学生課へ来ていて級友に見つかり、或日梅田で待合せて食堂で食事を共にして、前日宝塚昆虫館で買った蝶がガラス球に入った文鎮を名刺と一緒に渡したのが、帰校した翌日の寄宿舎の私物検査で見つかり、一週間の外出禁止となり土曜日に帰って来ぬのを不審に思った母親が学校へ問合せた末、原因が判り、私の家へ来て父親に一部始終を話したのでひどく叱られ（友人が来ていて隣の部屋で聞かれた）以後戦局も段々けわしくなり近所作ら余り会う機会もなく、私が満州へ現地入営の際、町内の人々と一緒に旗を振って送ってくれたのが見おさめであった。シベリヤから戦後復員して聞いたのは彼女の死であった。今ではすくなおる結核性脳膜炎で終戦後、近所で私の妹始め娘達に日本舞踊を教へていて近所の評判も良かったとか。今でも緑の制服姿のN・Aの宮崎緑に似た少し色が黒かったが鼻筋の通った顔が瞼に浮ぶ。彼女の元居た家は京文岡田部長の実家の前の家である。

宮村さんとソヨゴ・リョウブ・クヌギ等木の名を教へたりして一峰へ登り一休みして、急なジグザグの坂を下り谷川を渡る。谷沿いに登って尾根に取付き急坂をグレグレ登って聖徳太子修業地の石碑天宮塚に着く。その先あと0.6㎞の導標があり、少し下って登り左に展望台を見て間もなく中山最高点の二等三角点のある小広い山頂へ。

此所で一同展望を十分楽しみ昼食休憩する。北側は宝塚ゴルフ場や大宝塚ゴルフ場、西北に畿田猪之介（故人）の狩場大峰山がよく見える。食後休んで金網の両側はったコースを東へ下り向井山を越し、一峰に登ると金属の標石のあるピークに達した。一休みして若宮峠へ下り又登ると△361.7の四等三角点のピークである。東側一帯は山火事の跡で黒焦げの木やわらびの新生が目立つ。送電線の鉄塔の立つピークから尾根は急坂となり花崗岩の風化がひどく道形が消え急崖になった所もあ

り、要心して下った。下ると峠で右へ下ると最明寺滝へ。左へ下ってふじが丘団地に出て舗道を下ると万願寺バス停である。万願寺は多田源氏の氏寺で、昔此の辺り一帯を領有した多田満仲は源氏の一族で名高く、その子美女丸は謡曲「仲光」で有名である。美女丸は素行がひどく満仲は家来の藤原仲光に殺すように命じた。然し忠義心の厚い仲光は我子の幸寿丸を身代りに殺して差出した。その事を知った美女丸は前非を悔い改めて出家して僧となり、源賢と名のる高僧となったと語り伝へられているが、菅原の手習鑑の筋と同じく封建時代の友人道的物語りであろう。

バスの時間があるのでひばりが丘花屋敷駅迄歩いて阪急で帰京した。

〔参加者〕　坂井　他 3名

〔コース・タイム〕

9:00 ～ 9:02 四大 ― 10:15 ～ 10:35 中山 ― 10:40 ～ 10:53 中山寺… 11:06　2．8 Km… 11:14 ～ 11:20 テレビ塔… 11:45 ～ 12:05 休… 12:10　2．6 Km… 12:37 天宮塚… 12:56 ～ 13:35 中山△… 14:03 鉄塔の P… 14:17 ～ 14:35 金属の標柱 P… 15:02 ～ 15:03 4等△… 15:16 鉄塔… 15:45 万願寺バス停… 16:20 ～ 16:32 ひばりヶ丘花屋敷駅（解散）

黒頭峰登頂報告

津田　実

過日、白髪山え登ったので今回は、我が頭髪を思い浮べ、黒髪山え登ろうと思い、はてそんな名を持つ山があったかなーと、半信半疑で山名辞典を引くと、あった、あった。

「黒髪山、樹木が茂って、あたかも黒髪に覆われているように見える山を呼ぶ」とある。

何んと皮肉な表現か、然らば小生及ばず乍ら老骨に鞭打って登って見ようと、ページを繰って見たが、京都近郊には残念乍らない。そこで黒頭峰を見付け、三橋さんと共に行くことにした。

R372号を篠山で別れ、R176号を北上、大山から右折して高倉の集落に入る。途中の民家へとび込んで黒頭峰への道を親切に教えて戴いた。

もう少し行くと門がある。その少し前方にお堂がある。その裏の尾に小径がある。尾を登って行くと「タワ」になっている。それを左に行くと黒頭峰に行けると、古書に依れば、峠の語源は「山乢（たわ）」や「嶋弱（たわ）」て山乢、嶋弱も、山がたわんだ地形のことを云うとある、が、不覚にも小生それは死語と思っていた。それが日常語として使はれているのに愕然とする。　ただ、ただ我が不明を、恥入るのみ。

閑　話　休　題

厚くお礼を云ってその家を辞し、車を進めると立派な山門が出現した。余程の名刹が存在しているのだろうと思って進んだがお寺は何処にでもある民家風の建物でがっかりした。

然し、自然の流水を取り入れた庭は立派だった。そのお寺の前に車を駐めさせて戴き、林道を進む、少し行くとお堂があり、「地図上278地点」道が二分されていた。「此処で地図を好く読

んでおくべきだった」　我々は何んの躊躇もなく左の広い道を進んだ。

驕て林道は終り暗い杉林に突き当って仕舞った。お教導の尾らしいものは、見当らず、仕方なく杉林の中に突入、遮二無二上へ、上へと登り、途中一回の休憩で稜線に出る。すると明らかに人の歩いた跡が判然と付いていたのでそれを右手主峰の方向に進むと二等三角点が待っていて呉れた。

早速、写真をとり、三橋さんが持って来て呉れた、ベーコンと白菜と、小生持参のラーメンと餅で山中と思えぬ豪華な？大宴会を催した。然し天は我れに味方せず、今朝聞いた天気予報通り西南先週登った白髪山方向から急速に雨雲が進んで来た。そこで慌てて、宴会中止大いそぎで下山に掛る。山頂に滝谷峠↔夏栗山との案内板があったので夏栗山の方へ下りると、右から上って来ている小径とT字型の交叉になっている。地図で見ると左が佐仲峠で東中へ抜けるらしい。そこで朝、教えて戴いた尾に付いている小径とはこの径のことと思い出し、その道を下る。

此の径がどこえ出るのか？楽しみに歩くとお堂の裏にとび出した途端に雨が降り出した。なんと言う幸運か、家に帰ると冬と思えぬ大雨となった。

〔参加者〕　三橋　勉、　津田　実

〔コース・タイム〕　昭和６１年１１月９日

高倉午前出発 9:25…林道終点 9:35…山頂 10:30…山頂昼飯後 11:20…林道着 12:00

百里ヶ岳紀行

津　田　　実

百里ヶ岳、それは日本山名辞典に依れば、福井県小浜市と滋賀県高島郡朽木村との境、小浜線東小浜駅の南１１㎞、高さ９３１ｍとある。

又、別の書に依れば百里四方が見渡せるのでこの名が付いたともあった。小生が今取り付かれている木地師のルーツに縁（ユカ）りのある一石一字の塔の石碑があると聞き是非行きたいと思い、いろいろ資料を探し、三橋さんの案内を得て行くことが出来た。

ＡＭ７：００　三条京阪で来るはづの人を待ったが天候の加減か出現せず、止む得ず出発する。Ｒ２７号から上根来の集落へ向う途中、前方の小高い所に藁葺きの家を発見、エッあんな高い所迄車で行けるのかと感服、三橋さんが「国道から１０㎞も来た」と云う。ところどころに国鉄バス根来線廃止反対と大書した看板が立っていた。　これも時勢か!!

大谷林道の途中で車を駐めて歩き出す。九十九折りの林道も小谷で終り、沢歩きとなり、その谷がナメでよく滑り余程注意して歩かないとドボンと云うことになる。

折柄の小雨の中、雨具を付けて谷歩き程難儀なものはない、此んなところで怪我をしたら大変なことになると思うと自然に足の動きも緩慢になる。水場、「これより上に水場なし」の標示のある地点で一本立てる。

案内書に依れば、杉林の中の急登とあったが、地図上でも可成のものだ。四駆、全力で登る破目になり、やっとの思いで大谷出合に着く。

杉林の中だが風が強く、下着も汗と雨水で濡れて寒く、とても休んでいられない。頑張って頂上を目指し歩き出す。

腹は減るし、風は強いし、径が林のなかだから好いものの、木立ちがなかったら吹きとばされるかも知れない。

三角点の感激も何処えやら、登ったと云う証拠写真もそこそこに先程の出合の杉林のなかへ逃げ込む。今日の天気予報ではこんなに荒れるとは夢にも思はず、軽装だったことが悔まれる。食事をしているうちに雨も風も止み、元気を出して念願の根来坂へと向う。

径はしっかりしているが熊笹のなかの倒木のため、何回か大地に膝を付き乍らやっと左からの小径に逢う。これが小入谷からの径だと三橋さんに教えて貰い、右え下って行くと案内書に出ていた。ブナの大木が二本並んでいる広場に出た。先づ地形を見る、成程、昔の人は巧い工合に道を付けたものと改めて感心する。

さて、激しい風雨を押し、苦しい登りを越えて来た一石一字の塔、石碑にお詣りする。それは、伏木貞三さんの近江の峠、地蔵峠と三国峠の項P85に次のように書かれているので紹介しよう。

一　石　一　字　塔

一石一字塔というのは、偏面な小石に経文を書写して埋納したものである。一個の石に一字ずつ書いてあるためこう名づけられている。

中には大きな石に十数字書いたものもある。普通は墨で書かれているが、朱書きのもある。それをかめなどに入れて埋め、その上に碑を立てたのもある。

鎌倉時代から江戸時代にかけて盛んに行なわれた。年代の確かな最古のものは、1339年（延元4・暦応2）のものがある。

経典の保存という埋教本来の目的より、供養を目的としたものである。　　以上

実は此の文を読んで一度はお詣りがしたく地蔵峠へ行ったが信仰いまだ浅くか？　発見出来ず。高田収さんの中高年向きの山100コース、関西編P39に載っていたので本日の山行となったのです。充分にお詣りをすませ、写真をとらせて戴き、足どりも軽く下山に掛る。

案内書に依れば、ヤブがひどく、難路とあったが、時期的に冬枯れの頃か、（勿論、それを意識して今回登ったのだが）割合、簡単に古街道の跡を辿って大谷林道に出られた。

然し、此の径を登ると成ると優れた知識が要求されることを申添える。それは、手入れされた杉林で踏跡が発見出来にくい。途中、P708西側の捲き径付近が崩落していて、街道の痕跡さえとどめない個所があった為、優れた読図力と経験とカンが必要であろう。

今回は、岳友三橋さんのお陰で百里ヶ岳と、念願の一石一字塔にお詣り出来、古街道の面影を偲ぶことが出来ました。

三橋さん、有り難う御座居ました。心からお礼申上げます。

（参考資料）

登ってみねの福井の山		福井山歩会
日本山名辞典		三省堂
近江の峠	伏木貞三氏	白川書院
中高年向きの山　１００コース		関西編
	高田　収氏	山と渓谷社
大阪周辺の山　２００		山と渓谷社

尚　以上の資料は　三橋　勉氏依り借用致しました。

〔コースタイム〕　　昭和６１年１１月１６日

駐車地点 10:08…林道終点 11:00…水場 11:20…大谷出合 12:01…山頂 12:31…山頂下山 12:50…大谷出合 13:05…食事…大谷出合出発 14:00…根来坂 14:35…根来坂出発 14:45 井戸跡 15:08 …林道 15:50

山癖雑記　三十八

伊藤潤治

前　山

日本山岳会岐阜支部から１０月１９日に、中央アルプス南部の摺古木山、シラビソ、安平路山を登る、案内がきた。摺古木山は既登だが安平路山が未登であり待ってましたとばかり堺のＮさんを誘って参加することにした。

ところで、この界わいにも念願の頂上が並んでおり、この機会を逃がしてなるものかと前山、正ケ根、馬留山、兀岳、高ウド、風越山を皮算に及び、中津川図葉の前山に向って、１７日7時３０分京都東を進発。中津川で国道１９号に出て9時３５分。北行し松田の信号を右折、最上部の出作り家屋前に駆け上って１０時駐車。

前山は、美濃国恵那郡ノ東方ニアリ、中津川町ヨリ二里ニシテ其山頂ニ達ス。と日本山岳志にあるけれど、登る気が起きたのは、この方面の名紀行を綴った「わっぱ」「峻峰」をもらっているお陰である。

コースはその名紀行に従い、左へ曲り込む林道を横目に直進、ところが間なしに別れた林道に出た。記述の道に出会えぬままに進むと、ほどなく林道は終点。そこから右手の谷の道をたどって行くと、伐採で明るい斜面に出られ右に急登して尾根に上った先が紛れもない前山登山路であった。

それからは尾根の一筋道、木が茂り展望はなかったが樹相、露岩、急坂など自然の構造は、退屈させない。稜線に上ると、中津川市立南小学校六年生たちの登山記念柱二本が立っていた。これを

背にして西行、間もなく前山のⅢ△1350.7mがあり13時5分であった。せっかくの山頂ながら展望なく寒冷であったのと、東稜の正ケ根に心ひかれて落つけず、約10分の滞頂で△をあとにした。

正ケ根には記念柱付近へ荷物を置き乾盃用と電灯だけで行くつもりであったが弾みがつき過ぎ気がつくと、堂々と隆起した正ケ根を見上げる地点にきていて、道形も消えしたたかな笹の海、時に13時45分。魅力満る正ケ根ながらこの時間では心許なく、弁当を食べさようならを告げてきた。

その夜は駐車した出作家屋主のご好意で、のびのび宿泊でき、月も冴え御神酒もすばらしかった。

馬留山

久しぶりの木曽路であり、妻籠図葉の山である。馬留山とは、南木曽町と清内路村境で、清内路峠東の△1,474mである。この山に登るべく10月18日7時10分、清内路峠に駐車。トンネル南から境界稜に上り笹、灌木の100分。ひょっこり広い道に出た、そこが1,430mであったから拍子抜けの登頂になった。さらにあきれたのは△で、道が80度、160度方向に岐れていたこと。

しかしこの頂き、△の背を北へ笹を押分け出ると、初々しく冠雪した白山、御岳、乗鞍岳を一望させた。この振出し物の見晴らしには、なかなか感動が納まらず朝っぱらから陽を背にして、ぬくぬくと上機嫌になってしまった。

往路を下山したが後日、Sさんよりこの広い道の入口は、トンネル南を少し下った地点にある、と聞かされた。

夏焼山

馬留山をやった清内路峠から大平峠につき、そこの休憩舎で昼食のあと12時35分、南木曽町、飯田市境を兀岳に向う、清内路村境に至り左折して先を急いだが、鞍部を足下にした14時25分兀岳があらわになった。

そのあまりの崇高なのに圧倒されて、本日はこれまでと、恐れ入ったのであった。もう一つのショックは、逆光にそなえていたサングラスを紛失したこと。

大平峠に戻ったのが15時45分。岐阜支部の集合に間があるそこに、捨てる神あれば拾う神、であろうか、行程0.9Kmの夏焼山があった。

階段づくめの急坂道0.7Kmであって、ヒザにきびしかったが、登ってしまえば思いがけない広大な展望に、感嘆するばかりであった。頂上にはⅣ△1,502.5mがある。

摺古木山、　シラビソ、　安平路山

いい気分で大平センターにつく、高木志茂子さんに、お久しぶりです、の声をかけてもらった外は、佐藤幹事はきていたがなじみの顔はなかった。

何よりも気がかりであったのは、明日の行程（宿ー林道終点ー休憩舎ー摺古木山ーシラビソー安

平路山ー東俣林道ー大平宿解散）の内で、東俣林道が地形図を調べても不明、それと、この会費額で林道の送迎が可能か、だった。早速これを佐藤幹事に尋ねると、案内氏が目下偵察中ながら、東俣林道は所在せず従って、安平路山は摺古木山より往復、これが藪とかで安平路登山は、どうも無理らしいと、彼は青くなっていた。

安平路山をたのしみに参加した私はがっかり、しかし玄人の山行でこんなあほくさいことがあって、よいものかと腹立たしかった。

やがて案内氏は戻ってきたが、安平路は困難だと呑気な報告である。ここに至って、これが案内さんかと情なくうっかりやる気を失いかけたが、今更、安平路を登らずに帰れるかと吾れに還り、あくまで安平路を目指すことにした。問題は帰途での日没だが摺古木からの下山が容易らしいので勝算ありと判断でき頑張ることを決定して、晩さん会は盛大になった。その楽しい歌声の最中、安平路にそなえて節制、惜気もなく宿舎で横になった。

１９日朝4時１５分目覚める、外は霜でカリカリの寒さ、朝食を無理に食し弁当、缶ビールの支給があり、基揚さんのジープで5時３０分出発。林道終点下駐車6時１５分、バロメーター1750㍍から歩きだす。

この日もすごい晴天で、遠くまでよく見渡せられ登山道は鮮やかに凍てて美しい笹の底に快く続き、しみじみと幸福感に包まれたが、何というても高所で、いきなりの登行だから息が乱れて、摺古木山Ⅰ△2169㍍、7時５３分着は、なかなかしんどかった。

摺古木は1973年9月１８日に登頂、二基の標石がなつかしかったが、回想に更ける暇なく安平路に向う、折り折り足元は茂ったが「摺古木山ー安平路山」標が要所に立ち、テープ、吊布も多くそれほどのこともなくシラビソ稜は9時１０分。

シラビソに来られた所要時間により、前途の緊張が和らぐ「摺古木３．５㎞・安平路３．３㎞」を見て、樹林を出ると遮るものない景観に安平路がそびえており、これが本当に３．３㎞で達しられるかと、距離を疑い度肝を抜かれた。右の谷に水が流れる登りになって、早くも佐藤幹事が、しばらくしてやはり先行３名が、もう少しですといって下山していった。

意外に長い急登であえき安平路山Ⅲ△2363㍍は１０時５５分だった。よくぞ登れりと、しばらく成すことも忘れて感動。念願達成の歓喜にひたり伸びやかなひとときのあと、佐藤芳久、白木幹司、四手井晴彦、高木志茂子、高木基揚、中野正一の皆さんと、岐阜支部万歳ならびに京都支部ヤッホーを安平路山に捧げ１１時５５分下山。往路の安平路３．３㎞は３．８㎞の誤読で、シラビソ13時１３分。摺古木山には佐藤幹事の拍手に迎えられて１４時１６分。駐車点１５時３５分。大平解散は１６時１０分であった。

ちなみに1973年の記録を参照すると、摺古木登山口9時２５分。摺古木山１１時～１５分、シラビソ１２時。雨が降り出し摺古木山１２時４０分。登山口１３時５０分で、この折安平路を予定していたらしい。なお藪のため困難と聞けば、一応背を没するほどのジャンジャンを想像しよう。そうしたコースには相当な覚悟が必要である、そんな悪条件に勝負を挑んだこの度の岐阜支部の英断は、立派だったと称賛しておきたい。

兀　岳

岐阜支部の懇親山行の次は風越山であるが、時間不足で引下った兀岳がちらついて脳裏を去らず、基揚さんの助言を得るまで迷った。大平峠の木曽側に戻って、樹下草上に天幕を張り、食事は休憩舎を独専、安平路を楽しく回想しつつ雑炊、鰹のコッ酒その他の美味に陶然と温まれた。ただ手のみは、素手でいたため冷え切った。しかしホカホカ懐炉をもらい、ポケットで握りしめたあの温もりは、母の懐のようで、これまた忘れられない。

実に静か、街道筋と思えぬ快眠で幕外に出ると、作業姿の一人がトンネルを出てきた。その熟年氏は、峠に京都ナンバーが駐車している。届によってのお出ましだったが、兀岳を登りにきた、に対して、その人は兀岳に疎く一言の助言もなく去った。

7時40分、おとといの18日に枝折した踏跡をたどり始める。心急ぐ必要のない悠長な足どりでもはかどって、兀岳を仰ぎ見て恐れ入った地点を過ぎ、鞍部9時25分。そこから笹の急登になるが幸いにも、ケモノの跡かわずかな透き間の断続を縫うて進めた。槍が立ち、左に小尾根を分つ地点まで上ると、タオルが落ちテープが点在する思いがけない展開になった。この先にある宮点1410mでの明るい見晴しには、これは展望大だと唸らされて、兀岳Ⅲ△1636m着は10時53分。

へえー　これはまあすごい。どこに兀があるのか、緑は並び立ち南アルプスにも及ぶほしいままの眺望。あいかわらずの青空で、白い立枯独樹も印象深く、兀岳はこの山旅第一の頂上をもっていた。11時40分うしろ髪をひかれ下山。大平峠を13時50分、家路につき、17時20分めでたく京都帰着。

このええこと尽めのあとヒザに不快があり、自分が依頼したせっかくの山行にもやむなく不参、不名誉な休養をした。

明星山と有明山

11月2日・3日は、わさび会の首脳さんによる越後の明星山と信濃の有明山という豪放な広域山行に便乗。ことしも文化の日にふさわしい誇らしき登頂ができた。

明星山は、みようじさん　と訛み、良質の石炭岩が無尽蔵ともいわれ、南壁の岩稜は岩登りの対象となり、山名は明神がつまったものであるという。

この地の黒姫も雨飾も未登だが、ここにも宮崎和作測量官ゆかりの△があって、私の小滝図葉はあまり新しくない。その小滝図葉を目的外の明星山に持出す、こんなことは初めてであろう。

11月2日、5時30分に大垣出発。北陸自動車朝日IC、9時30分で8号線を北行、越後に入り親不知にかかると、片側交通などで渋滞し、青く澄んだ大海原や白く砕け散る波打際の明るい景には和めたが、山山は悪化するという天気予報が的中するのか、ガスが立ちこめて、いらだたしき眺め。

姫川を渡って、味福ラーメン店10時40～11時15分昼食のあと、148号線を姫川沿いに小滝川出合まで遡り、岡の集落から林道を縫うて行く。

目を引いたのは、東に浮ぶ戸倉山・善光寺山だった。その彼方は、やはりガス、それは仕方がな

い位いに思えたのだが、いま目指しているこの明星にまといつき、頂上を押隠している白いベールには、許せないほどの憎しみがわいた。

日影を抜けると、燃えんばかりの紅葉に迎えられ、ガス嫌悪も解消して５９０m地点に１２時１０分駐車。そこから約５分で「頂上へ８０分。矢印、右」の明星登山口標があり、左へ上っていく林道を背にする。紅葉の林間には、あけびも。むらさきは、霜が流れし　あけびかな、水巴。果肉は失せていたが、立派に一役、秋を担っていた。

甘露なる水場より南に向い、せせらきをまたぐと、椿群の光沢を放つ深緑の回廊がしばらく続き右に渓流、左に小流を見るようになって、泥道の点在が顕著になった。伊吹山も藤原岳も石灰岩だが、こんな湿道を知らないのに。

８０分地点より３０分歩き、「右、ヒスイ渓、竜護尾根、頂上１００分」「左、明星山頂５０分」の分岐点、標高８４０mに上れた。

小流をまたき汁道が岩を縫いはじめた９３０m地点で、急登にそなえて一本立てる。空は灰色に煙り、疎林に秋色なくちょっとわびしい周辺だった。それから巨岩の並ぶ登路に２５分専念、登り甲斐の歓びを感じさせてもらうと、明星山Ⅲ△1,189mであった。

頂きは、白鳥、妙高の展望台といわれているが、視界ゼロ。晴れてくれれば、相当な高度感に酔えるに違いないと、心に残る山頂である。無風で温かであったのと、金沢大パーティ、岩登り組の後続もあって、いささか長居をしてしまった。

ちなみに、宮崎和作測量官の小滝図葉での△は、城山△５２５m。赤禿山△1158m。一難場山△1518m、の三点。

明星山を下山して、１５時３５分有明荘に向う。渋滞多く、白馬山麓で夕闇に紛れ、大町市の街灯にほっとしたが束の間で、また暗路をたどり有明荘着は１８時３０分になった。９月に予約済だけあって、部屋は良くお湯も格別、満悦のところでＮＨＫテレビ、こころ、を見て寝た。

朝湯を誘われたが床離れできずにいると、よいお湯であったし、よいお天気になったと戻られた。まさかと怨辺に立つと、すばらしい紅葉と抜けるような青空、これで一ぺんに眼が覚めた。

有明荘を7時４５分に出て、約１５分で樽沢の滝、ここからジグザグに登ること７～８分で、階段道は終り左折して笹道に入った。

急登の連続で9時１３分、四合目石あり標高1800m、その先に頂上へ1.7km標もあった。そこから右へトラバースして、南へ廻りこみ岩ヒダを縫って行き、曲り沢に落下するガレでは、大天井岳がまぶしい雪稜と彩りも鮮やかな五段染めで立ち、思わず足をとめた。六合目石、1970mの辺りから石楠花群落が続き、輝やく岩壁を仰ぎ見て、しばらくにして七合目石、１０時３０分。

八合目石、きれいな赤褐色の樹幹は、くろべ、だろうか。その稜線沿いを南へ、雪にはっとしたがその部分のみ、展望が開けた岩稜、有明神の祠を経て１１時２０分有明山Ⅱ△2268.3mにたどりついた。

その前に迫力ある見晴らしのため、肝をつぶしていた。妙高、飯綱、猫、浅間その他や燕、大天

井の黒と白での魅力あふれて、飽かさせない大観望にである。

それにしてもこの快晴には、悪い予報にもめげず、にやってきた大垣さんへ三度目の正直の賜り物に違いない、と特に感動させられ、改めて有明は、ほんまにええ山や、唸った。

この計画を知らされたのは一昨年であったか、この有明山が日本山岳志に、大天井山、屏風山、雨吹山、馬羅尾山、五六岳と並べられているところから、有明山のついでに地形図も同じの、雨吹山と馬羅尾山も登れないかと、松川町にお尋ねして資料をいただいてある。その山波は、今たくましい格好で、こちらをにらんでいる。私は、どきりとした。

１５時１５分帰路につき、有明神社参拝。木曽路は雨、夕食に、くるま屋の日本一そば。振り出し大垣に２２時寸前着。

ところで私は山菜が大嫌い。それを今度は夕・朝ともすんなり食べられ安心したのだが、果たせるかな約2時間おきに不快、　それにともなって持病にも影響。加えて左ヒザ支障の再発が関わって随分パーティの足を引張ってしまった。

この後遺症が意外にしつこく、長年の宿題であった荒谷山不参にまで及んだ。やはり、山菜は怖い。もう生涯、山菜は食べないぞ。左ヒザを、いとしみつつ　1986年11月21日。

第３０回　歩　こ　う　会

紅葉の名所 東福寺（通天橋）
稲荷山神域めぐりとぬりこべ地蔵

田　中　定　勝

主　催　　深草稲荷保勝会　　講師（案内役）　中島　至 先生

１１月２３日（日）祝　　晴

午前9時集合場所　京阪東福寺

受付にて今日のコースのプリントを頂いて世話役に参加者の人数を聞くと、約２００人と云われた。

出発東福寺　9：10　　本町通りより東福寺山内で講師の紹介があり、東福寺通天橋此処で（１時間自由行動）其の間本営、山門等拝観して講師の話を聞く。

〃 通天橋 11：00　　仲恭天皇陵参拝　稲荷山御前谷屋台湯茶の接待 11：50

〃 御前谷　1：00　　薬刀大神1：20　おせき大神1：40　剣大神 1：50

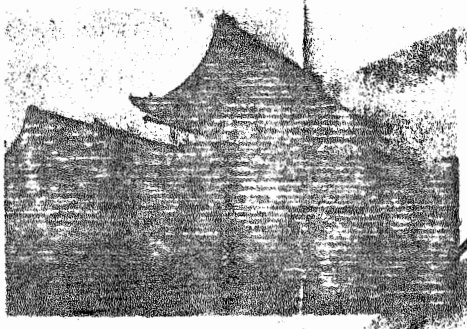
一の峰大神2：10　二の峰大神2：30　三の峰大神 2：40

大社奥の院奉拝所 3：20　稲荷大社本殿 3：30　茶室（重分）3：50

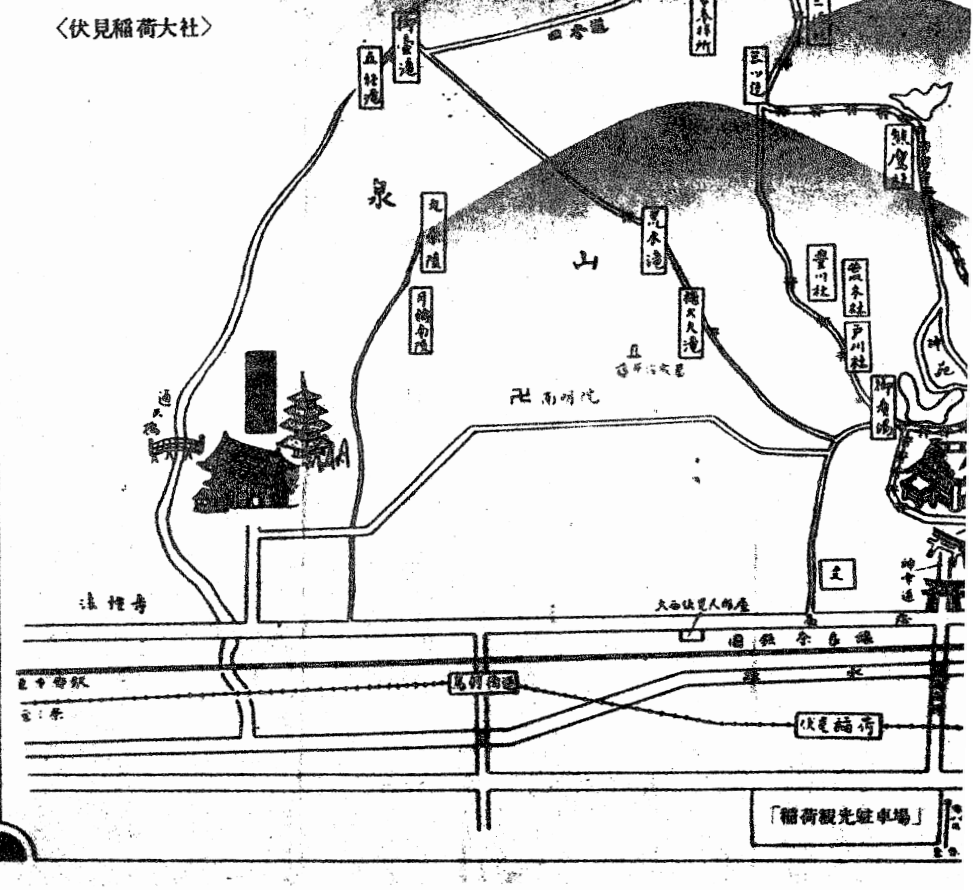
東丸大神4：00　ぬりこべ地蔵4：20解散

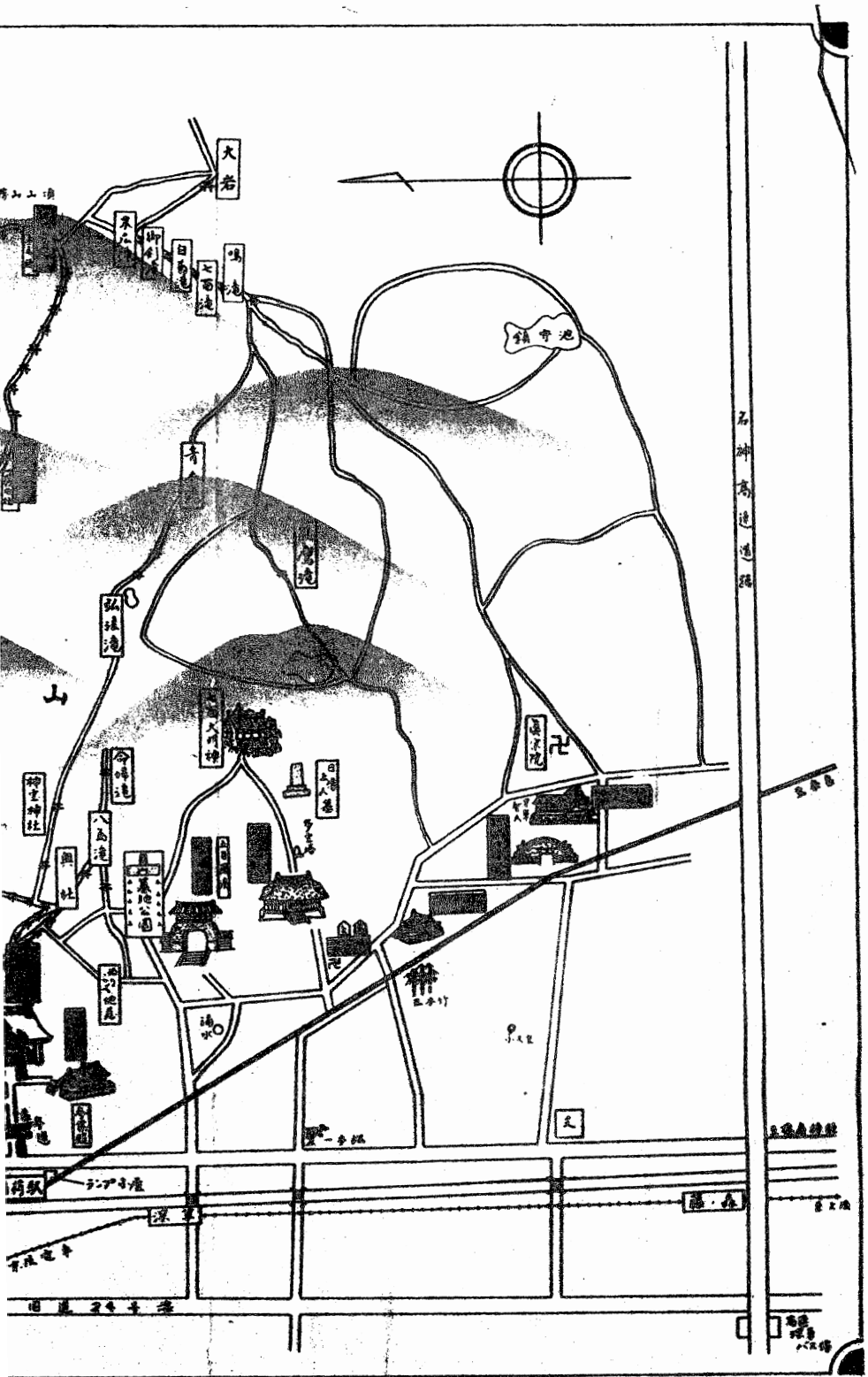
京都伏見稲荷 周辺

名所旧跡 案内図



〈伏見稲荷大社〉




大岩
鳴滝
鏡池
青人
弘法滝
山
神宮神社
八島池
奥社
名神高速道路
駅
深草

東福寺

当寺は恵日山と号し臨済宗東福寺派の大本山で、関白九条道家が聖一国師を請じて開山とし、鎌倉時代の嘉禎二年（一二三六）に創立にかかり、十九年後の建長七年（一二五五）に竣工した九条家の氏寺で、奈良の東大寺と興福寺の一字づつをとって東福寺と名づけたという。
爾来禅宗五山の一に挙げられ、今日に至っている京都における最も有名な寺の一つである。明治十四年（一八八一）仏殿、法堂方丈等を焼失したが、東司、禅堂等、なお幾多の文化財を遺存している。

通天橋

仏殿から開山堂に至る途中、洗玉澗とよぶ渓流に架せられた橋廊で数多い列柱が構造的な美しさを示している。その中央に舞台をつくり、そこに立って見下ろす秋の紅葉の美しさは有名であるが青葉の頃のさわやかさも格別である。この橋廊は、夢窓国師の高弟普明国師が東福寺造営を督した時、開山堂への往還のため架けたもので、現在の通天橋は慶長二年（一五九七）豊臣秀吉の命により、安国寺恵瓊が建造した桃山時代の遺構である。また通天橋の上流には慶長八年（一六〇三）に造られた偃月橋が、また下流には臥雲橋が架っており、あたりの渓谷の風趣によく溶け合うて美観を呈している。

伏見稲荷大社

日本の津々浦々にまで知られた商売繁昌の大神様で、全国三万余の稲荷社の総本宮である。御鎮座は奈良朝初期とはなっているが、実際はずっとそれ以前からといわれる。正月初詣での雑踏は身動きできぬほどであり、初午祭をはじめ各祭事ならびに毎月一日の月参り、各日曜日は参拝者が殊に多く、平日もなお鈴の音が絶えない。

ぬりこべ地蔵

稲荷大社より東南へ二〇〇米深草墓園に至る（深草大門町）にある。歯痛祈願の本市の筆頭で、歯痛の平癒を祈ったハガキが全国各地からおびただしくよせられ、小さな堂内にはハガキが山積してある。こころみにその一文を手にとってみると、右奥二枚目の上奥がいたんで困ります、三日のあいだにおなおし下さい。などとあり、中には「このハガキ着き次第に云々」というのがあって、しかも宛名は単に「京都ぬりこべ地蔵様」だけで配達されるなど、当世著名人なみである。この地蔵尊はもと直違橋通の浄土宗摂取院の境外墓地（旧師団街道西）にあって塗込めの堂宇に安置されていたからこの名があり、また途込めを病気を封じ込めるという義に解してかかる信仰が生じたものであろう。

例会報告

例会№	目的地	月日	天候	担当者	参加者	記事
1606	秋山 集中登山 御岳	11月1日 ～3日		岡田 茂久	(先発) 広瀬光、 大木、井戸 (後発) (岡田班)岡田、和田、 方山、渡辺明 (鷲見班)鷲見夫妻、 出海、武田夫人	先発(最年少班)と後発に分かれて行なった集中登山。 (別稿詳報)
1607	荒谷山と 市振	11月14日 ～16日		大槻 雅弘	(京交) 坂井、奥村 武田、吉田 (山ノ会) 西尾、横田明、竹内、 横田	何を好んで、こんな処の山まで来て登るのか。地元の猟師の人でさえ知らないような山を。その猟師の猟犬をつれた京都山の会との合同登山である。(別稿詳報)
1608	府県境 シリーズ 三国岳・ 弥十郎ケ嶽	11月23日	晴	津田 実	岡田、渡辺智 鷲見夫妻、 三橋、津田 原田、方山 (阪急山の会) 谷田、 榊	老の坂を越えた途端〝霧〟。朝霧は好天のしるしと云はれるが… (別稿詳報)
1609	多田ケ岳	11月30日		大槻 雅弘	吉田F3、 三橋、和田 大木、津田 渡辺智	「海のある奈良」とも呼ばれる若狭小浜は、かって都と大陸を結ぶ要路であり… (中高年の山ー 野代から多田ケ岳) より (別稿詳報)

(訂正) 12月号の第1605回例会 小野村割岳の参加者中、三橋さんは和田さんの間違いでした。

部　員　動　静

目的地	月　日	天候	参加者	記　事
敦賀市黒河周辺	10月26日	晴	大槻　貞従 三橋　勉	今月5日に続いて又、野坂山地へやって来た。 （別稿詳報）
中山連峰縦走	10月27日		坂井　久光 他3名	山渓の原稿のための中山連峰縦走… （別稿詳報）
黒頭峰	11月　9日		津田　実 三橋　勉	我が頭髪を思い浮べ、黒髪山へ登ろうと思い。 （別稿詳報）
百里ヶ岳	11月16日		津田　実	百里ヶ岳は小浜駅の南11Km高さ931mとある。 （別稿詳報）

雑　報

12月の集会

4日　厚生会館　4F

出席者　本局　大槻雅、三橋、方山、大木　　OB　坂井、津田　　烏丸　大倉
梅津　吉田　　高速　岡田　　以上　9名

（1）　岡田部長より吉田さんに日本山岳協会（日山協）中央審判員認定証、大倉さんに同、地区審判員認定証を渡されました。

（2）　インドア　大槻雅弘　「冬山の生活について」
山での食事を工夫することは、山の生活を向上させることにもなるので、「山の食事の工夫（特に冬山での）」について話しあった。

（3）　例会予定の変更について　（12月号記載分）
- 12月7日の暁晴山は天吉寺山に変更しました。
- 62年1月26日の大丈寺山は金剛山、湧出岳に変更します。

（4）　その他

他山岳会の会報（受贈分）

11月号　青嶺
12月号　近畿山行、北山、木雞、京都山岳、山友、跋渉譜、趣味の登山、比良山岳
その他　聳嶺13号（一等三角点研究会）、かもしか「創立30周年記念号」（敦賀山の会）

帆　布・濾　布
テント・シート
雨　合　羽

木村工業有限会社

京都市中京区ミブ車庫前
TEL　801－5331(代)
西大路営業所
下京区西大路七条下ル
TEL　321－0251

愛される スポーツ店

京菱運動具店

本　店　下京区大宮通松原上ル
TEL（801）1331
十条店　南区竹田街道十条上ル東側
TEL（691）8041
伏見店　伏見区伯耆町西友ストアー4F
TEL（623）0824
山科店　山科区音羽野田町1番
西友ストアー山科店
TEL（592）9770 内線 228

営業時間　**一年中、山用品だけのプロショップ**
午前10～午後1時と午後3時～午後8時
（午後1時～3時は閉店させて頂きます）
<定休日>　火・水曜日

山・アウトドア　プロショップ

ログケビン

LOG CABIN

京都市中京区御幸町通
蛸薬師南入
（四条河原町・阪急河原町より徒歩約4分）

建設省国土地理院発行地図販売特約代理店

あらゆる地図のご用命は

株式会社

小林地図専門店

600　京都市下京区烏丸通六条下ル
TEL 075(351)6598(代)
地下鉄：烏丸五条　6番出口南50m
市バス：烏丸六条下車

昭和62年1月1日

京都市中京区壬生坊城町48
京都市交通局内
京交山岳部

お　知　ら　せ

今度、当チロル店舗は近代ビル改築計画に伴い、一時立退きと相成りました。
改築期間中（約1年間）は、本店2階にチロルコーナーとして継続営業いたします。

チロル

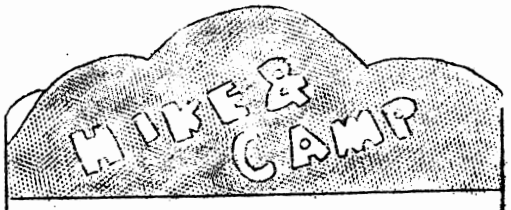
移転先　本店2階
京都市中京区西ノ京円町24
ダイヤ運動用品株式会社

HORIIKE KYOTO
まかせて下さい…ネ
山とスキー
☆在庫豊富にとり揃えています
☆山の道具は　ゼヒ　御相談下さい
山とスキー専門店
ビッグ・ホリイケ
河原町店　上・河原町通丸太町東入
TEL　222−0363

御婚礼
御引越

専門
ぎおん菊水運送株式会社
山科配車センター
京都市山科区西野山階町　12−12
TEL（075）581−3101
本　社
東山区大和大路四条下ル　541−2345
美川営業所
中京区室町二条上ル　256−3059

結婚引出物・内祝・開店記念品・粗品
仏事用お返し品・お中元・お歳暮用品
贈答品総合センター
厚生会指定
サンコークラフト
西　島　輝　雄
左・川端丸太町下る下堤町88
TEL（075）771−3442



この用具の事ならコニシが一番です！
御来店ありがとうございます
山とスキー　レジャー　スポーツ　ショップ
そして
海の　コニシ
中・二条通河原町西　TEL　231−1202